



ヒトはなぜ 自然に 手を合わせるのか

5elements blessings of nature

右上から／橋杭岩・熊野の雲海・白崎海岸
那智原始林・熊野川
左メイン／滝の拝

優しいだけでなく、厳しいだけでもない。四季折々に姿を変える日本の自然。海や山は混交し、人々はその中で寄り添って暮らす。自然は文化や文明と対峙しているものではなく、気配に敏感な日本人の美意識を刺激する。

「森を歩くのは人間の根源または内生を探すことであり、山頂に登るといのは世界観を手にするということ」と宗教学者

の山折哲雄氏が自然と人間の関係を語る。「森に足を踏み入れると、ふと感じる不安。樹々に視界を遮られ、方向感覚を失ってしまうからです。熊野古道では、不安とは相反するある種の心地よさを感じることがあります。それは胎内回帰にも似た無類の安心感。熊野古道では、神の存在を信じるか信じないかではなく、感じるか感じないかなのです」。そして古道という産道を抜けると、仰ぎ見るほどの那智大滝。思わず漏らす感嘆の声。人々はいつの間にか手を合わせる。

「しかし現代において日本人は手を合わせるものが少なくなつたような気がします。合掌は宗教的な意味だけでなく、世界の至るところで自然に行われる行動のひとつ。両手を胸の前で合わせる事で隠し事がなく敵意もないことを表現しているともいえます。また両手で触れることで、そ

の物に込められた思いにさえ近づけるような気もします。以前永平寺の雲水たちと食事を共にしたのですが、物音ひとつ立てない。よく見ると茶碗を持ち上げるのも降ろすのも必ず両手を添えている。その所作は日本的で非常に美しかった」と言葉が続いた。

そして知としての美しさは混沌の中に存在する。混沌は秩序へ、カオスはコスモスへと進化するが、紀伊半島における高野山や熊野三山は神仏習合という混沌のまま存在する。それは極めて知的で芸術的な世界だ。空海は密教という高度な世界観を高野山で表現し、現代の空海ともいえる南方熊楠は、熊野の山中で見つけた粘菌から宇宙の真理を覗いた。単純な二元論で語られることが多い時代だからこそ、空海や熊楠のような力オスな天才が生まれいずることを期待したい。

日本最大の紀伊半島、
神々しくも穏やかな自然の中で
気高く息づく文化を探る。